

第三幕

登場人物…

ロビン

ビートル（仕立て屋）

オウル（墓堀り）

ルーク（牧師）

カイト（棺運び）

トラッシュ（聖歌隊）

ブルファイ（鐘撞き）

道端の木に動物達が集って談笑している。

ちゅんちゅん、ぴーちくぱーちく、ほうほう、etc…。

遠くから極々微かな泣き声がフェードイン。

目の良いカイトが何かに気付く。

カイト 「おや、あれは」

ロビンが泣きながらとぼとぼと歩いて来る。

大声でわんわん泣くのではなく、

零れる涙を両手でぐしぐしと拭きながらしゃくり上げて。

ロビン 「つく、ひつく」

他の動物達もロビンに気付きざわめき始める。

トラッシュ 「どうしたの、カイト？

あれは…ネズの木の家の方やじゃないの」

ルーク 「本当だ、ロビン坊やじゃないか」

ブルファイ 「ウサギみたいにお目目を腫らして」

ビートル 「まあブルファイ、それ本当？ なんて可哀想！」

オウル（鼻）は一人だけ乗り遅れて目をこすっている。

欠伸混じりに。

オウル 「あふあ。こんな真昼から何をめそめそしてるんだか。

この陽射し、絶好の昼寝日和じゃないか」

ブルフィ 「オウルの兄さん、それはあんたが夜行性だからさ。

ロビン 坊やは人の子で。

昼間は元気に遊び回っているものよ」

オウル 「ほう、それなら確かにおかしい。

独りぼっちですんすん泣いてるだなんて」

オウルの『ほう』は鳴き声とかけている。

ぱたぱたと動物達がロビンの元へ飛び立っていく。

オウルも少し遅れて重たい腰を上げる。

何羽かがロビンの肩に止まり、

羽根でそっと涙を拭ってやりながら。

ルーク 「これ坊や、ジュニパー・ロビン。

どうして泣いているんだい」

ロビン 「…泣いてなんか、ない。

ちよっと、目が、痛いだけ、なんだ」

嗚咽を喉の奥に押し込みながら、強がる。

トラッシュ 「しょっぱい涙は美味しくないよ。

蜜の味がするのなら、

幾らでも飲んであげられるんだけどね」

動物達は訳知り顔、事情をよく知っている様子で。

ビートル 「またママにいじめられたの？」

ロビン 「違う、違うよ、そんなじゃないさ。

そんなじゃないって事にして。

ママは僕の事、嫌いみたいだけど。

それだとマルレーンが泣いちゃうから」

カイト 「妹のためならロビンお兄ちゃん是我慢できるのかい」

ブルフィ 「あんたのママは我俣よ。

あんたは嫌い、でもマルレーンの事はだあい好き。

あんたは何も悪い事なんざしてないのに、ね」

オウル 「可愛い可愛い実の娘と。前の女が残した息子。

我が子可愛さは生き物らしさ、よくある話。

至極残念な事だがね」

落ち着いたロビンが話し始める。

ロビン 「台所から、お皿とお匙がなくなっただ」

ルーク 「お皿とお匙。ディッシュにスプーンか」

ビートル 「それならルーク、これはきつと駆け落ちね」

ロビン 「駆け落ち？」

トラッシュユ 「昨日は確か満月ね。」

誰か牝牛が月を飛び越すのを見ていない？」

カイト 「それなら見たさ。俺がこの目でしかと見た」

ロビン 「満月だから、お皿とお匙は消えちゃったの？」

オウル 「そういや、昨夜はフィドルの音色が聞こえてたね。

穏やかで、伸びやかな、いい心地の音だった」

フィドルという言葉に顔を見合わせると、

鳥達が第二幕と同じメロディをとって歌い出す。

トラッシュユ 「♪猫はフィドルを弾き鳴らし、」

カイト 「♪牝牛は月を飛び越して、」

ブルファイ 「♪それ見て小犬は大笑い、」

ルーク 「♪そうしてディッシュとスプーンは、」

トラッシュユ 「♪逃げ出し、駆け出し、駆け落ちよ、」

自慢の声でドヤ、という感じで。

歌っていない面々は小さく歓声を上げてぱちぱちと拍手。

ロビンの手前、わあっと沸くのではなく控え目に。

なお、歌っていないのはビートルとオウル。

カブトムシは虫なので歌えない、鼻は夜行性なので。

ビートル 「皆さん流石にお歌がお上手。」

中でもやっぱりトラッシュユの声は格別ね」

『トラッシュユ』はやや名前としては語呂が悪いので、

『トラッシュユ』に近い発音を推奨。

トラッシュユ 「それほどでも」

まんざらでもない様子だが、すぐに畏^{かしこ}まって。

ロビン 「それじゃあ、お皿とお匙はもう戻って来ないの？」
オウル 「きつと、帰って来ないだろうね」

少し俯瞰するような物言いをするオウル、
メタ視点を持つている雰囲気が出始めてくる。

ロビン 「そう…：…なのかな」

ビートル 「そんな言い方は残酷よ」
しーっ

カイト 「Shh, ビートル。残酷と言う方が残酷じゃないか？
まあ、どちらにしたって」

ルーク 「オウル、君の言葉はどうにもしばしば」

ルー・カイ 「残酷だ」

二人揃ってオウルにびしりと指差し。

誰も理解者はいないという様子でやれやれと独り言。

オウル 「まったく、誰も解っちゃいない。…：…この世界は、

マザー・グースの世界っていうのは、

何処までも残酷なのが取り得^とだろうに」

ロビンだけが聞こえていたようで不思議そうにぼつり。

ロビン 「残酷…：…」

それに気付きおや、と含み笑いをするオウル。

オウル 「そう、物語には悲劇と残酷が付き物なのさ」

ブルファイ 「何をぶつぶつ言ってるの、オウルの兄さん？」

オウル 「いいや、寝言さ。私は眠い」

肩を竦め、近くの木に凭れかかるとうつらうつら。

しばらく蚊帳の外を決め込むオウル。

ロビン 「でも、戻って来ないなんて、僕困るよ。

このままじゃご飯が食べれない。

ママが、言うんだ。

お皿がないならご飯はお鍋から食べなさいって、

お匙がないならご飯は手で食べなさいって。

パパはシチューが大好きだから。

僕ん家のご飯は毎日シチュー」

ビートル 「惨い事を言うママね。

そんな事をしたら、貴方のお手では大火傷」

ここからロビンの長語り。

合間に動物達の相槌が挟まるイメージでひそひそと。

ロビン 「朝起きたらもうお皿もお匙もなくなってたのに。

ママは僕が失くしたって言うんだ。

僕がつまみ食いをするために、夜中にこっそり

起きてきてお皿とお匙を使ったんだって」

トラッシュ 「呆れた想像力」

ブルファイ 「自分が坊やにちゃんと食べさせてないって

自覚があるからこんな妄想ができるのね」

動物達は完全にロビンの肩を持っているので、

多少ママに対して悪意のある言い方になっても可。

ただし、あくまでリスナーには一見それが

さも事実であると思えるようにナチュラルに。

ロビン 「シヨークをインメツするために、汚したお皿と

お匙を何処かへ捨てて来たんでしょって。

…：僕、そんな事してない！

ぐうぐうお腹は鳴いたけど、ちゃんとベッドで

ウイリーが来るのを待ってたんだから。

なのにウイリーは中々来ないし」

ルーク 「待っている子がいるっていうのに」

カイト 「けしからんね、寄り道ウイリー」

ロビン 「マルレーンが羨ましい。

ママから夜食に真っ赤なリングももらえるし。

お布団はガチョウの羽根でふかふかで」

ガチョウという単語を聞き、オウルがロビンに向き直る。

オウル 「ロビン、悪い事は言わないが。

そろそろ家うちに帰りたまえ。

ただでさえ、君の名前は不吉な名前。

…：もう、とうに手遅れかもしれないが」

二行目まではシリアスに重く、三行目でトーンを下げ、四行目は完璧に他人に聞かせるつもりのない台詞。

ロビン 「え？」

動物達も訳が解らないというようにオウルを見る。

ブルファイ 「それは一体何のお話？ 全然筋が繋がらないわ」

オウル 「そういう話だ。筋なんて端からありやしない」

トラツシユ 「訳が解らないわね」

カイト 「つまりは、オウル。」

お前はロビンに諦めて帰れと言うわけか」

ビートル 「帰ってもご飯も食べれないのに？」

オウル 「探しても見付からなければ帰るしかあるまい。」

君らは何だね、ロビンを家にも帰さない気かい？」

ビートル 「そうとは言っていないけど…：」

不満そうに唸る動物達。

オウル 「さ、可愛いマルレーンが探しに来る前に。」

帰って全部忘れておしまい」

ロビン 「うん…：…そうする」

トラツシユ 「♪ Good-bye, Lovin', you」

『Lovin', you』はラヴィンの響きをロビンにかけて。

発音は正規の『ラヴィンニュー』よりも

若干『ロヴィンニュー』に寄せて。

某アニメのキャラソンに混入されていたネタをフィート。

ロビン 「ありがと、皆。じゃあ、またね」

ロビンが手を振って去っていく。

動物達もぱたぱた手を振り返す中、

オウルが腰を上げ立て掛けていたショベルを手取る。

動物達の輪から抜けようとするオウルを呼び止めて。

ルーク 「どうしたんだい、オウル。」

君の仕事道具の出番はまだじゃないのか」

意外そうに眠たげだった目を少し見開いて。

オウル 「ほう」

この『ほう』も鳴き声とかけて。

オウル 「そう遠からず解るだろうさ、ルーク。

誰がロビンを殺すのだろうね。

ほう、ほう、ほう」

誰が×××を、と聞こえるように。

『ロビン』の部分は編集で伏せ処理。

プロローグの『たまご』と同様の演出。

最後の鳴き声は第二幕の冒頭等に挿入するSEと似せて。

むしろ、可能であれば梟の鳴き声のSEも

キャストさんをお願いしたく。

また、ここの『ほう』の響きは『Who』に寄せる。

『Who Killed Cock Robin』の伏線。

解説..

マザー・グースに登場する動物や無機物は全て擬人化。

擬人化といっても非常にアバウトな都合主義で、

擬人化体で墓を掘っていた次の場面で

鳥の姿になって飛んで行く事もできる。

監督宛..

トラツシユは聖歌の似合う綺麗な声でお願いします。

他の鳥達については、脚本中でもある程度傾向は

分かれています。各役割と元の鳥のイメージを

踏まえた上で細かい性格付けはお任せします。

採用するキャストさんの声質や演技にに応じて、

口調や担当する台詞の変更などがあっても構いません。

一人称も萌え重視で変更してしまっても下さい。